
メメット

フラミンゴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メメント

【コード】

N3057X

【作者名】

フラミンゴ

【あらすじ】

勇者を召喚しました。何故ならそれが私の役目だからです。

アバンタイトル

静謐に張り詰めた空気を僅かに揺らす私自身の呼吸の音すら、まるでその場を汚してしまっているようで、思わず詰めていた息を私はゆっくりと吐いた。

殆ど飾り気の無い白いワンピース一枚の素肌には、ここの空気は少し肌寒い。耳元でアンタレスが囁く。吐息と間違っ程の囁きを、私は聞き漏らさないように耳をすませた。

緊張しているようだな。

「当たり前でしょ」

オマエが失敗する筈が無い。心配は無用だ。体を鈍らせる、息を飲むな。

励ましもとれるような彼のらしくない言葉に、私は笑う。

何故笑う。

「だって、君がらしくないから」

不満げに唸るアンタレス。自覚が無いのかな。

「有り難う、私は大丈夫。きっと成功させるよ」

そうして私は足を踏み出した。勇者召喚の祈りの間へと。

灼熱のメメット

人が恋に落ちる様を初めて見た。まさしくそれは落ちるかのような感覚を、彼は味わったのだろう。だって、何故判るかなんてそれは隣にいた私すら落ちるかのような気分にしたたのですもの。底の無い沼の底へと。

「それでは、そんな困難な旅をなさってきたのですか。それなのに私は何も出来ずに……」

「え、そんな事無いわよ！メメットは私を悪い貴族から守ってくれたしさ。メメットのおかげで凄い助かってるわ！」

決まり切った社交辞令をさも心配したかのように言ってみせる私に、少女マナミは可愛らしく笑って答えた。必死に私のフォローをしようとする様は、まさに無垢な女の子といった感じで、彼は彼女のこんなところに惹かれたのかな、と自嘲気味に思う。

「けれど、こんな事を言っつてはあれですが、召喚されたのが貴女のような方で本当に良かったですわ。こちらが勝手にやる事ですし、断られる事も考えておりましたのよ。それを貴女は本当に快く受け容れて下さって、感謝していますわ勇者マナミ」

止めてよ、と言って照れくさそうに笑ったマナミは、後ろに控えた騎士団長ウエルフと目を合わせて笑い合った。その光景は、まるで中睦まじい恋人のようだ。いや、実際私が知らないだけで、もしか

したらもう恋人なのかもしれない。

「最初はさ、急に知らない場所に喚びだされてびっくりもしたけど、今はこの世界を守りたいって思うんだ。メメットみたいな友達も出来たし、それに……」

頬を赤らめて言い淀むマナミ。先を促してやる。

「好きな人も……出来たし」

「あー、はいはい好きな人ね。御馳走様ー。ばればれなんだよあんな達。全くウエルフの奴は何の為に勇者に付き添わせているか判っているのかな？花婿修行の為じゃ、断じてないんだけど」

メメットよ、口調が戻っているぞ。それに、そんなに怒る事も無いだろう。危険な旅に恋は付き物だ。

「お黙り、アンタレス」

そう怒るな。

「おちよくつてるの？私を誰だと思いい？」

広大な内海と肥沃な大地を持つ大陸アルバーヌ。その大陸を支配する王国メリオポの、灼熱の第四王女とは何を隠そう私の事だ。別に隠していないけど。

ついでにそんな私には、生まれ持つての重要な職務が有った。すな

はちそれは、勇者召喚の巫女というものである。

勇者の紀元は遡ること約五千年。それは、建国の時の話。

この国の肥沃な大地とは、ただの神の恩恵ではない。決して死なない魔物、ナルタミレケの魔力故だった。

ナルタミレケ、この世界の創世神話に出てくる魔物の事だ。それはいかに魔物が長く生きていくを示している。この地に初代メリオポ王が国を建てようと決めた時既に、魔物はそこにいたそうだった。

奴はメリオポ史で初代メリオポ王によって殺されたとされているが、真実は違う。その強力な魔力の前にもうしようも無くなった王は、大陸に魔物を封印する事で奴が瞬き程も身動きが出来ないようにしたのだ。

その時王は、自分の魔力で足りない分の戒めを補おうと大地との盟約を交わした。この地で暮らすメリオポの民達が幸せである限り魔物は目覚めない、そんな盟約を。

盟約が厳守されている限り、この地は平和な筈だった。そう、人々が幸せならば。

「あーあ、良いご身分だよー。西で内乱が起こるし、東で山火事が起こるし、ここ王宮では腹黒い狸親父どもが誰かの失脚を狙っているってのに、あそこだけ春のようだったよー」

実際に良い身分だろう。はしたないぞ、メメット。

豪華な部屋に設置された机に足を乗り上げる私にアンタレスが溜め

息を吐く。溜め息吐きたいのはこっちなんだけど。

五代目のメリオポ王の時、国民は飢餓に苦しんでいた。するとどうした事だろう、大地に封じ込めた筈の魔物が目覚めたのだ。

魔物は再び封じられる事を恐れてメリオポ王を殺そうとする。アルバーヌと盟約を交わせるのが代々メリオポ王のみという掟故だ。

魔物は街を壊しながら王のいる王都まで迫っている。盟約条件の為に玉座から離れられない王は、神官達に魔物に対抗しうる力を持つ生き物を召喚させた。それが勇者召喚の紀元だ。

「…彼女は魔物を倒せるのかな」

私が呟く。心配や恐れなど私の中には無く、ただあの少女が憎らしかった。呟いた事に意味など無い。それなのにアンタレスは律儀に返す。

何を世迷い事を。オマエの召喚した勇者だろう。必ず遣り遂げる筈だ。

「……………そうか」

アンタレスは判っていない。私が何を恐れていて、何を厭わしいと思っっているかを。魔物なんかじゃ絶対無い。違うんだよ、アンタレス。

現に、あの小娘は北にはびこる魔物の手下を、仲間を集めて一掃してきた。なかなか手際が良いんじゃないか？明日は凱旋だそうだな。

面白そうにアンタレスが言う。不謹慎だ。

第一、仲間を集めただなんて言うけれど、マナミをいれてたったの四人じゃないか。その内一人は我が王国の騎士団長ウエルフだし。

「仲間集めに労力と時間はそう必要無いだろ」

少人数で無事に帰ってこれた事を指して、手際が良いとオレは褒めたのだ。なにか機嫌が悪いな？

「……ナルタミレケも可哀想に。ただ有りの儘生きていたところを突然現れた新参者に邪魔されて。暴れたくなる気持ちも良く判るね」

メメツト、言葉が過ぎるぞ。

「……冗談さ」

神妙な声で注意してくるアンタレスに、私はなんとも言えず茶化した。アンタレスは気にしていない、と少し笑う。冗談なんかじゃないと気付いただろうか。

私はもつと不謹慎だ。

きつと疲れているんだろう。明日は休め。そうだ、バルコニーから凱旋を眺めたらどうだ？きつと気晴らしになる。

「凱旋？勇者とその仲間の？面倒くさいな。彼らは皆づるさいし」

面識は無い。しかし、昨日王の間で彼らを迎えた時に一度だけ見た事があった。無駄に騒がしくて良く笑う四人。ウエルフとマナミを

除いた他に、魔術師らしき小柄な少女と旅人の様な軽装をした少年がいた。

王の前でまるで行儀のなっていない行いの数々。ウエルフが焦っていたけれど、父上は気にせず、むしろ彼らを気に入った様だった。バルコニーにいれば、誰がうるさかろうとオマエまでは聞こえ無いただろう。

「……そうだね」

違う、うるさいから嫌なわけじゃないんだ。私は、私は。不意に部屋の扉がノックされた。急いで姿勢を正して返事をする、女中が入ってきて明日の予定を一通り聞かされる。予定にはなんと勇者ご一行との会食が入っていた。王族は全員参加って、勘弁してよ。

「以上です。なにかお聞き逃しの点はございますか？」

「いえ。ところで、昼の凱旋には出た方が良いでしょうか？」

「陛下方はバルコニーから見物なさるそうです」

「私、昨夜から気分が悪くて……」

「左様でございますか。でしたら、姫様におかれましては自室で休養という事になさったらいかがでしょう」

「そうしますわ」

それでは、と言ってあっさり女中は部屋を出ていった。

凱旋を見るのはやめるのか。

気分が悪いだなどと嘘だろつに、とアンタレスの気配が、言いはしないが責めてくる。

「……………」

あまり嘘は良くないぞ。

「ごめんなさい」

アンタレスに咎められて謝る。それでも明日、バルコニーから皆で仲良く国民に手を振る気なんて到底おきる筈が無かった。

彼に初めて会ったのは、私が七歳の時だった。

貴族の正装をして私の前に跪く十六歳の少年を見てまず最初に、私は可哀想だと思った。

鈍色の頭髮が見えるばかりの彼は、こんな年下の少女に頭を下げて何を請おうと言つのだらう。私に権威など無く、有るのは血に縋って肥大した無意味な自尊心だけなのに。

「顔を上げなさい、ウェルフ・ワートルム」

「はい」

本当の私は何も持っていないのよ。

鳥の囀りが聞こえる。私は今、王城の庭に横たわっていた。

庭と言っても裏庭で、下働きの者達の通用口がある様な場所だ。いつもならば大騒ぎになるだらうが、今はパレードに出払ってしまつて誰もいない。

もし誰かいたとしても王国の政治にあまり関係なく、表舞台に出る事の少ない私になど誰も気付かないだらう。でも、それは少し、寂しい事かもしれなかった。

陽射しが暖かい。今日という日を世界が祝福したかの様に空は晴れ上がっていた。

「だいたい、魔物を倒したわけじゃないのに大袈裟なんだよ。いや、暢気なのかな。この国から恐怖の根源が消え去ったわけではないのに、よくもああはしゃげたもんだね」

だからこそだろう。なんだ、まだ機嫌が悪いのか。昨日何かあったか。

アンタレスは珍しく、私の言葉に怒らずに心配そうに訊ねた。昨日の事があるかもしれない。

私は理由を言うつもりは無いので無言になる。彼は嘘を吐かれる事がとても嫌いなので、私は必然的に黙り込むしか無くなるのだ。

……言いたくないのなら別に良い。だが、無理はするなよ。

「うん」

無理をしないとはどういう事なのか、頷いたもののよく判らない。あまり塞ぎ込むな、という事かな。

現状、私は無理などしていなかったが、アンタレスが私の為に気を割いてくれるのが嬉しくて礼を言った。なんだか、今日の彼は優しい。

「アンタレス、私の事好き？」

優しさついでに甘えたくなって聞いてみる。この憂鬱をどうにかしたいのだ。アンタレスに好きだと言ってもらえる嬉しい。だって、彼は世界の誰より私の事を知っているから。

私の突拍子も無い質問に、アンタレスは慣れた風に答えた。

ああ。オマエは間違いなくオレが選んだ契約主だ。オマエ以上の者などありはしない。

言い切ったアンタレスに、私の機嫌は断然さつきよりも良くなる。アンタレスがいて良かった、と常々思っていた。彼のおかげで私は一人ぼっちじゃない。二人ぼっちだ。

「ねえ、いつごろまでここにいれば、誰か私に声を掛けてくれるかしら？侍女でも、近衛兵でも、下働きでも。誰なら見付けてくれるかな」

機嫌の良くなった私は、誰かに見咎められたら大人しく部屋に帰ろうとさえ思った。しかし、訊ねる私の声に応えは返ってこない。おかしく思っただけ名前を呼ぼうとすると、草を踏む音が頭上で聞こえた。

私はひやりとしながら咄嗟に跳ね起きる。

見咎められても構いやしないとは思ったが、それは害意の無い人間に限った事だ。背後から気配を消して近付いてくる人間など持つての他だった。

長いドレスの裾を翻して相手と向き合う。

「あ、貴方は……」

相手は、私が思いもよらない人物だった。

綺麗な青空、いつもより人の多い街並みに、どこからともなく舞落ちてくる花弁は魔法によってか。

勇者一行が、メリオポの北方を魔物の手のものから取り返したという話は、人々の口伝てに野を越え山を越え国民に伝わった。まだ北方のみとはいえ、立派な成果である。

魔物の進行を止めた北方の地では、また人々が昔の暮らしを取り戻し始めているという。今日という日は、そんな勇者一行の凱旋パレードだった。

基本、凱旋というのは全てが終わった後にするものであるが、このところ魔物のせいで何をすることも静かになっていた国民を盛り上げようと、国王が提案し勇者が同意したのである。

そんな凱旋パレードを一時間後に控えた勇者一行はというと、緊張に固まっているかと思いきや焦った様に周りをきよるきよると見回していた。

「どうしよう、ウェルフ。テトがいつまで経っても戻って来ないわ」

「落ち着けマナミ。… いったい、あいつは何をしているんだっ」

「も、もしかしてどこかで迷っているんじゃないでしょうか……」

魔術師らしき少女の声で、マナミとウエルフは納得した顔をする。どうやら凱旋パレードを目前に控えているというのに、勇者一行の内一人がどこかへ行ってしまうたらしかった。

「またか…。まあ、いざという時は仕方が無い。テト無しで凱旋を行おう」

どうもいなくなった人物は、よく単独行動を行って仲間を困らせている様だ。ウエルフの反応には少しの疲れが見える。

「それまでに帰って来れば良いんだけど…」

気取る事の無い足取りで近付いてきたのは私と同年くらいの、一人の青年だった。彼は、私など見えていない様に辺りを眺めてからやっと私に焦点を当てる。

静かな深い森を連想させる瞳にはつまらなそうな色が浮かんでいて、風で奔放になびく朱色の髪が、信じられないくらい鮮やかだ。私は思わず目を瞠った。

何より、彼の着るその衣。目を凝らしても何がどうなっているのか判らないぐらい細かな模様が編まれている。身軽そうなそれと、腰に携えた弓と矢を見て私は確信した。

そう、私は彼を見た事がある。それも、王の間の勇者謁見の際にだ。

彼は勇者と供に旅をしていて、今は凱旋パレードに参加している筈の弓使いの青年ではないか！

「テトラルド・リノリス様？」

「なに」

「…勇者一行の弓使いテトラルド様？」

「だから、なに」

まさかと思いつながら何度も名前を呼ぶ私に、彼は訝しげな視線を送る。でも、そんな風に見られる謂われは無い。むしろ私がそうしたいぐらいだ。

「あの、私の勘違いで無ければ、今は凱旋パレードの最中だと思うのですが。違うかしら」

「違うない」

気負い無く肯定した彼に、私は自分が何か勘違いをしている気分になる。

「……パレードは、もう始まっていますわよね」

「そうだな」

あれあれ？と首を傾げる私をどう思ったのか、今度は彼から話し掛けてきた。

「なんで、俺の名前を知ってる？」

言葉はどこことなくたどたどしい。それで私は、彼が森で旅暮らしをする一族の人間であると、マナミに聞いた事を思い出した。確か彼らは独自の言語を持っていたように思う。

「私、一度貴方とお会いしましたわ。貴方は覚えてらっしゃら無いかもしれませんが、王の謁見の間に私もいましたわ」

「王族か」

彼の眉がぴくり、と動いたのを私は見逃さなかった。外行きの笑顔を貼り付けて、穏やかに訊ねる。

「ええ、私達の事がお嫌い？」

言つと、彼は僅かに戸惑う素振りを見せた。

仕方がない。いくら勇者の仲間といえど所詮は人だ。王族の無知さか、傲慢さか、何が彼の気に障ったのかは知らないが、今の王家に疑問を持つ国民が多い事を私は知っていた。

けれど、だからと言って彼に彼らに魔物の討伐を辞退されてしまつたら、それは心底困るのだ。アンタレスにはああ言っているものの、実際のところ魔物の進行具合は明らかで、綺麗事を言えば民の平穏に拘るし、あからさまな事を言えば、勇者を召喚した私の面目が丸つぶれだ。

ここは一つ、どうかして彼の機嫌をとらなければ。

「良いのですよ。本当の事を言つて下さつて」

「違う。ただ、ここが嫌いなだけだ」

「……?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3057x/>

メメント

2011年11月5日16時17分発行